

予備教育機関での学び

マラヤ大学予備教育センター

太田 いずみ

私が派遣されている派遣先機関は、マラヤ大学の予備教育センター内にある日本留学特別コース（以下、AAJ）です。学生は約2年間、日本語だけでなく、教科（数学、化学、物理）を学び、日本留学試験及び修了試験に合格すると、日本留学への切符を手にすることができます。学生は朝から夕方まで授業を受け、毎日の宿題や小テストをこなし、皆で切磋琢磨しながら日々勉強に取り組んでいます。

AAJ の日本語指導助手（以下、指導助手）の業務は多岐にわたります。「日本語の授業」を中心に、定期試験の見直しや作成のサポート、イベントの企画・運営のサポート、学生指導などがあります。担任を受け持つと、担任業務も入ってきます。今回は AAJ での業務の一部をご紹介します。



AAJ キャンパスの様子

教授力の向上に向けて

1年生の初級段階での教科書は『みんなの日本語』です。授業の進度は非常に速く、1日1課という速さで進んでいくため、学生にとって1日で学ぶ情報もとても多くなります。また、教師にとっても一つの語彙や文型にかけられる時間も限られてくるため、いかに効率よく学習項目を導入して授業を進め、話す量を確保しつつ定着へ結びつけるかがポイントになってきます。

有難いことに AAJ には日本語上級専門家を含めて7名の日本語専門家（以下、専門家）が派遣されており、全員が日本語の授業を担当しています。そのため、様々な視点からのアドバイスが受けられます。また、授業見学も気軽にすることができます。もちろん、ローカルの先生にもご教示いただくことが多いです。例えば、授業で使う場面がマレーシア人にとってイメージしやすいか、どのような母語の影響が表れやすいかなど、ローカルの先生といろいろ話がしやすい環境です。

上記のような恵まれた環境でアドバイスを受けながら実践や振り返りを繰り返し、次の授業へつ

なげていきます。そして1年目が終わる頃には、教え方の基礎が形になってきたなと感じました。2年目である2023年度は、それらを軸に自分のスタイルを作りつつ、いろいろなやり方を試しています。

授業の教え方は教師によって違います。過去の経験やビリーフが異なっているからです。教え方に正解はないと思いますが、自分が培ってきた日本語教授に関する技術や知識を、いかに目の前の学習者に合わせて授業を組み立てられるかが大切なのだと学びました。AAJは日本語教授力の向上の場として、非常にいい環境だと思います。

話せるように

AAJの学生は予備教育期間の約2年間で大学で過ごしており、AAJの講師以外の日本人と日本語で話す機会はほとんどありません。そのため、授業をしていて、授業内ではある程度話せても教室を出ると話せない、簡単な受け答えもできない、という学生が多いと感じていました。また、AAJでは口頭試験がなく、2年生になると会話授業もなくなってしまいます。せめて1年生の間に日常的な会話力は身に付けてほしいと1年目に思っていました。

そこで、会話を担当している同僚と相談しながら、1年生の会話授業の見直しを行いました。見直しにあたり考慮した点は、①自由な会話の時間を増やす、②日本語の講師以外の日本人と話す機会を作る、の2点です。①は、例えば授業で「趣味について話す」といったお題だけを学生に示し、あとは自由に話してもらうことにしました。②ですが、AAJには理数科目を教える日本人の講師がいます。その講師の方々に授業に入ってもらい、学生と自由に会話をしてもらいました。1年生の間は理数科目の授業が少なく、講師によっては学生と話す機会もあまりないということもあり、学生も新鮮な気持ちで日本語で話せるのではと考えました。

①②ともに、学生が一生懸命に話している姿が印象的でした。「緊張したが楽しかった」という学生からのコメントもあり、いい刺激になったのではないかと思います。日本語教師のサポートがない状況で話してみても、学生は客観的に現在の自分の会話力を知ることができたのではないのでしょうか。また、学生の話す量を増やすことができた点もよかったと思います。



理数科目の先生との会話授業の様子

これまでを振り返って

AAJ のプログラムは 42 年もの歴史があり、すぐに何かを大きく変えることは難しいですが、日々感じたことをまずは声に出して言うことが肝心だと思いました。経験が浅い自分が言うことなんて・・・と思わないで意見を言ってみると、小さいことでも何かを動かすチャンスをつかめるかもしれません。指導助手だからこそ、挑戦させてもらえることも多々あります。任期も残りわずかですが、最後まで悔いが残らないように過ごしていきたいです。

以上